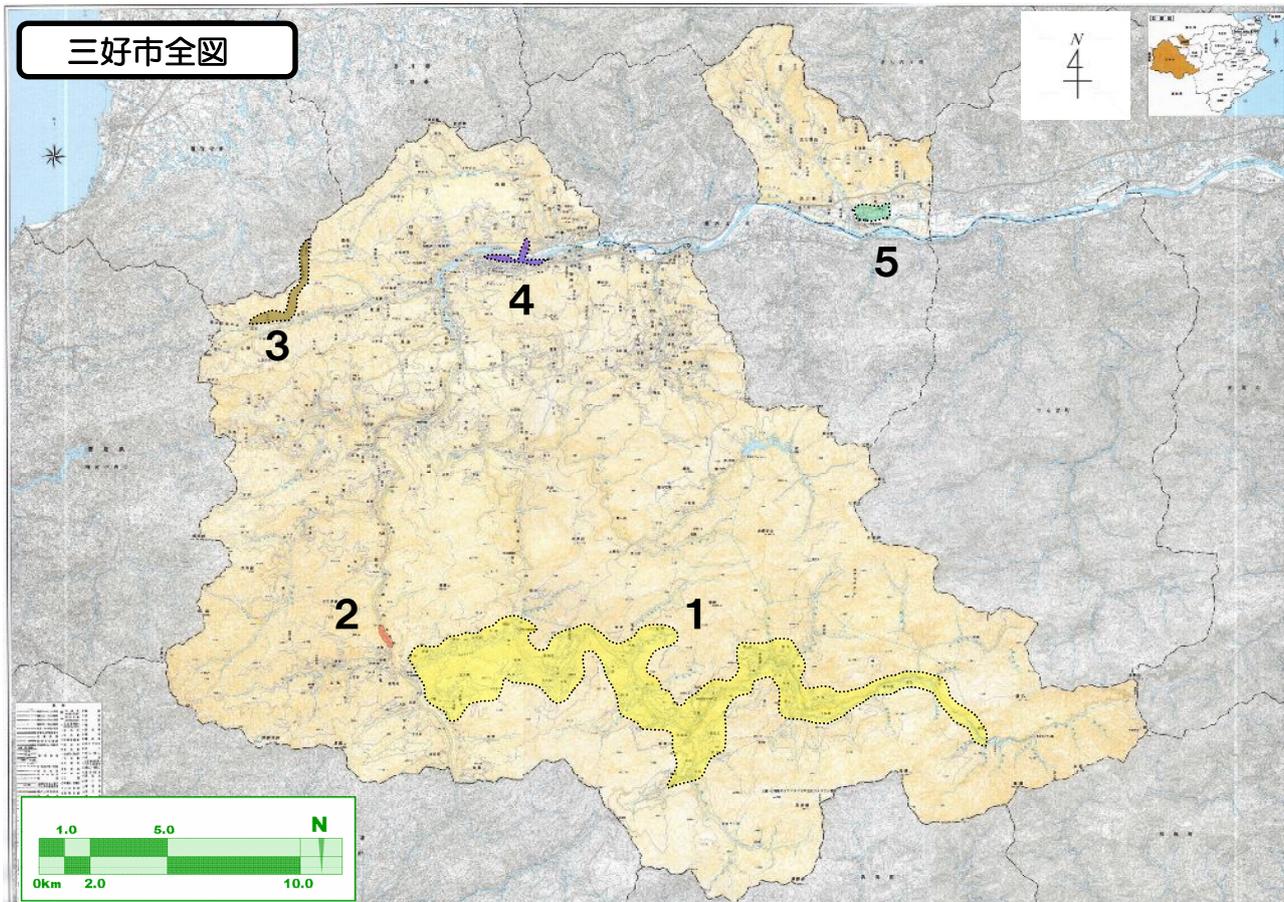


## 第2章 みよし 三好市の維持及び向上すべき歴史的風致

三好市のそれぞれの地域を流れる川は、その流域の景観や風土を代表している。それはそれぞれの川が、地域の特性としての歴史や文化、景観を育んできたためともいえる。その流域ごとの文化や景観の役割を見直し、その個性をひきだすと共に、地域の自然や生活と一体となった「三好市歴史的風致」を維持及び向上する。その流域ごとの維持及び向上すべき歴史的風致エリアは次のとおりとする。



### 三好市の維持向上すべき歴史的風致の状況

1. よしの 吉野川 いや 支流祖谷川流域に残る歴史的風致（祖谷）
2. おおほけこほけ 吉野川上流域に残る歴史的風致（大歩危小歩危）
3. うまじ 吉野川支流馬路川流域に残る歴史的風致（池田町佐野）
4. いかわちよう 吉野川中流域に残る歴史的風致（池田町及び井川町）
5. こうちだに 吉野川支流河内谷川流域に残る歴史的風致（三野町）

## 1 吉野川支流祖谷川流域に残る歴史的風致（祖谷）

### ①地域の歴史

祖谷地域は東西約50km、南北約12km、面積334km<sup>2</sup>（三好市域の約46%）で、東端の剣山つるぎさんをはじめ、周囲を高山に囲まれた険阻な山間にある。そのため、畑作中心の自給自足の生活を余儀なくされ、粟・稗・蕎麦などの雑穀が作られたが、1612年の検地帳には、稲作こうぞはもちろん、茶、檜（和紙の原料）などの栽培も記されている。

現存する最古の遺物は、西祖谷山村えのきほこの銚神社所蔵、紀元1世紀鑄造と推慮される「袈裟襷文銅鐸」けさたすきもんどうたく（県指定有形文化財）であり、すでに原始・古代に外界との交通路も整っていたことがうかがえられる。また、1759年の『祖谷山旧記』、1815年の『阿波志』などには、古代の祖谷山開山者えいらみこは、恵伊羅御子と小野姥おののうばであり、農耕や紡績を教えたとの伝承も記されている。

中世初頭、平教盛の二男国盛が、幼い安徳天皇を奉じて祖谷山に入山したという伝承はあるものの、「集落」が記録として初めて登場するのは、菅生集落の名主管生氏が継承した南北朝期の文書13通（県指定有形文化財）のうち、1350年の「阿波国祖山郷内菅生名」という記載である。その後、戦国期に発出された東祖谷阿佐氏いやしゅうへの書状には、彼らを「伊屋衆」と表記している。

近世初頭、豊臣秀吉の命により、阿波には蜂須賀家政が入国、中世以来の既得権を認めない蜂須賀氏に対し、祖谷山36名の

名主たちが反乱を起こした。名主の半数は投降、半数は斬殺され、うち7家が断絶となって1590年に反乱は終結した。

その30年後、東西20集落から計27振の家宝の刀剣が召し上げられたことに端を發し、名主18人が家政に直訴する事件が起こった。結果、1620年、11人が処刑され、天正の7家を加えた跡地18集落は、家政の命を受けた喜多氏の支配するところとなる。

以後、祖谷山は、藩の施策として陸封されることとなるが、自然の地勢に加え、この400年前の歴史的な事実が、後に「秘境」と称され、古来の文化が長く保存される状況を生み出した最も大きな要因だったと言える。



■祖谷遠望図（『東祖谷山村誌』昭和53年発行より）

江戸の頃の祖谷地方。急峻な山間地の峰伝いに形成されていた交通路の様子がうかがえる

## ②地域に見られる歴史的建造物

### ②-1 重要伝統的建造物群保存地区

#### 「東祖谷山村落合」 おちあい

東祖谷にある落合集落では、湧き水の多さや日当たりの良さから、古くから多くの人々が住み集落が形成されている。

地区内は、山腹から麓にかけての斜面に石垣で屋敷地や耕作地をつくる山村集落であり、江戸時代中期から後期にかけて建てられた主屋などの伝統的建造物を多く残し、石垣や里道、

しゃそう  
社叢などの周辺環境とともに一体となった歴史的風致が見られる。

また地区内にあるさんしよ三所神社では、祭礼行事が年3回行われており、集落の繁栄や五穀豊穡などが祈願される。



■対岸の中上集落から見られる落合地区

### ②-2 東祖谷山村落合「東家住宅」

重要伝統的建造物群保存地区内では、東家住宅のように屋敷地に主屋、その西側に隠居屋を配置している祖谷の典型的な並びが見られる。

当家は江戸末期から明治初期に建築され、土地の形成は斜面を切盛して前後に石垣を築き細長い屋敷地を確保している。もとは茅葺き屋根であったが、昭和40年にトタンを被せ、入母屋造風茅トタン葺きとなっている。構造は、棟木下には中引梁を通すのが、この地方の民家の特徴である。柱は、上にいくにしたがって細くして横材を落とし込む、オトシコミ構法が使われている。壁の表面は、ヒシャギ竹と呼ばれる割竹で覆い、土壁を風雨から守っている。

また、家を支える石垣や急傾斜地畑を支える石垣も見られ、祖谷の特徴がよく見られる貴重な家である。



■東家主屋



■東家隠居屋

## ②-3 東祖谷山村落合「三所神社」

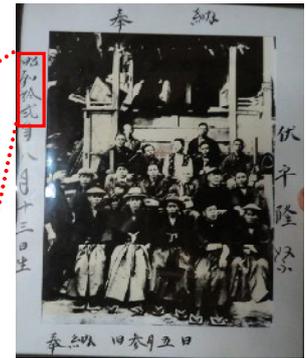
三所神社は伝統的建造物群保存地区のほぼ中心にある神社であり、集落から離れたところにあった宮鳴神社と集落内にあった聖神社を、現在地にあった祠と昭和6年に合祀した神社である。拝殿及び本殿の建立年代は『阿波誌』（明治44年発行）によると、延宝5年（1677）に置くと記されているが不詳であるが、昭和12年の古写真や手水舎の銘文の昭和19年から、少なくとも昭和10年代には建立されていたと考えられる。



■三所神社



■昭和19年に奉納された手水舎



■昭和12年の神社鳥居の改修完了記念

## ②-4 民家や田畑を支える石垣

石垣は民家とともに祖谷地方にある集落の歴史的環境を構成する重要な要素であり、多くの石垣は、棟札より江戸から昭和初期に建てられていた民家、畑田に多く見ることができる。

積み方は「だるま積み」と呼ばれ、土地を造成する時に出てきた石を利用し、民家に使われる石は大きいものを利用し、田畑には小さいものが利用されている。

石の形状は長い石が多く、祖谷地方で採れる石の特性として一定方向に層状に剥離するため、剥離しても全体の崩壊につながらないように積まれている。



■民家を支える石垣



■畑を支える石垣



■田を支える石垣

②-5 平家屋敷「阿佐家住宅」<sup>あさけ</sup>

建築年代は棟札より文久2年（1862）。宝暦9年（1759）『祖谷山旧記』には「平氏門脇中納言教盛之二男國盛」直系の子孫と記されており、伝・平家の赤旗（市指定有形文化財）、伝・平家の墓（市指定史跡）が現存する。

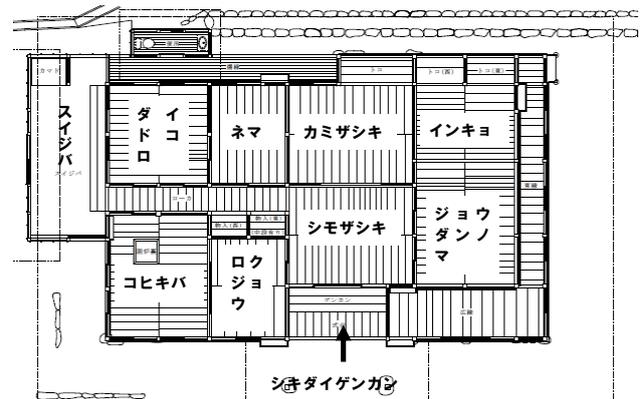
主屋はこの地域の一般的な農家で見られるオモテにあたる部屋がなく、式台玄関※1を設けるなど山間の高取※2屋敷の典型例として貴重であり祖谷八屋敷の1つである。屋敷林、庭園、石垣、前庭等の屋敷構えを含めて平成12年に徳島県の有形文化財として指定されている。



■平家の赤旗



■阿佐家住宅



■阿佐家住宅の間取り

※1：玄関にある上がる手前の一段低い「段」の部分のこと  
 ※2：藩から扶持を与えられ、在地の藩士に準ずる待遇を受けた家

②-6 蔓橋地藏尊<sup>かずらはしじそうそん</sup>

建立年代は、銘文から文政12年（1829）であり、重要有形民俗文化財である「祖谷の蔓橋」のたもとにあり、蔓橋を渡る通行人や架け替えを見守る場所に建立している。

県道32号線（旧祖谷街道）が開通した大正9年頃から毎年7月21日には、供養及び家内安全祈願のため、地元住民のお参りや清掃が行われている。また、3年に1度の蔓橋の架け替え時にも、安全に速やかに終わるよう安全祈願のお参りがされている。



■蔓橋地藏尊

てんまんぐう  
②-7 天満宮

建立年代は不明であるが、『西祖谷山村史』(昭和34年発行)によると宝暦5年(1755)及び昭和10年(1935)に拝殿及び本殿共に、部分的な改修がされたと記録されていることから、少なくとも昭和10年(1935)には、この地に建立されていたと考えられる。

ぜんとく  
天満宮は、善徳集落の標高1,033mに建立しており、神代踊りの起源とされるすがわらのみちざね道真を祭祀している。

ぜんろく  
この集落は、もとは全六と呼ばれており6つの集落を意味しており、その集落名に「片山」があり天満宮は、元は片山名※1のうぶすながみ産土神※2であったとも記録されている。

※1 中世起源の名集落

※2 その者が生まれた土地の守護神



■天満宮



■拝殿(平成4年改修)内部一部古材が残る



■天満宮本殿(昭和10年改修)



■天満宮境内で行われる神代踊り

【祖谷地域に見られる伝統的建造物の特徴】



■重要文化財（建造物）「小采家住宅」



■重要文化財（建造物）「木村家住宅」

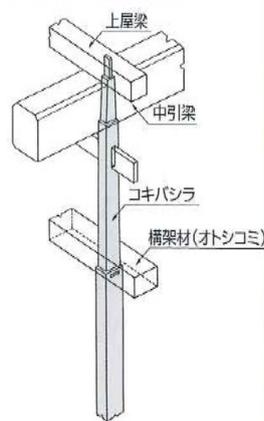
よせむねづくり  
 ■屋根は寄棟造で、茅葺きの大屋根を軒先まで葺き下し、庇をつけないのが古くからのやり方である。現在ではほとんどが茅葺きの上をトタンで覆っており、軒先を切り上げて金属板等の庇を設けている家も多い。

ひさし  
 ■ひしゃぎ竹とは、竹を炙り、ひしゃぎ（押しつぶす）、土壁に貼り付けている壁であり、土壁を風雨から守るために考えられたものである。

■前便所は、オモテ・ナカノマ境の前面に設けられ祖谷でよく見られ、祖谷地区の民家の特徴となっている。ナカノマとの境ではなく上手前に設けるもの、縁が妻側にも廻っていて妻側に便所を設けるものもある。

■建築工法は、棟木下には中引梁を通すのが、この地方の民家の特徴である。柱は、上にいくにしたがって細くして横材を落とし込む、オトシコミ構法が使われている。

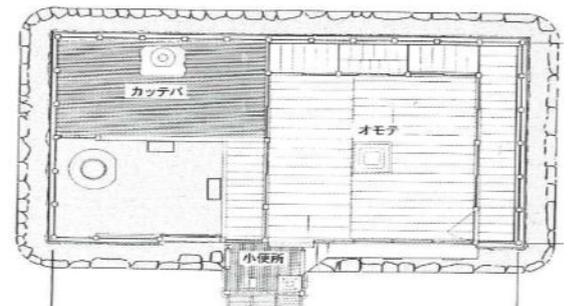
みま  
 ■間取りは「一間取り」や「中ネマ三間取り」と呼ばれるものが多く、正面中央に前便所が置かれているのが典型的である。



■オトシコミ構法



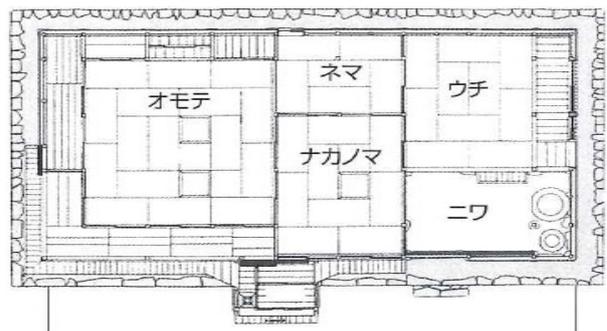
■ひしゃぎ竹



■一間取り（小采家住宅）



■隠居屋（手前）・主屋（真ん中）・納屋（奥）と並ぶ祖谷地方の独特の屋敷構え（木村家住宅）



■中ネマ三間取り（木村家住宅）

**【まとめ】 祖谷地域の各集落に残る歴史的建造物**

祖谷地域に見られる建造物は、寄棟茅葺屋根であったことがわかる歴史的建造物が多く見ることができる。これは1,000m級の山々に囲まれ、古くから交通の難所であり、閉鎖的な環境であったことから自給自足の生活がなされ、現金収入が得られなかったことから、建造物に大きな改変が行われず、当時のままの姿形で残ったと思われる。

急傾斜地での屋敷構えは独特であり、重要文化財である「木村家住宅」や「小采家住宅」のように、主屋、隠居、納屋は等高線に沿って建ち並んでいる。これは山の斜面を切り開いて土地を形成しているためである。また前庭を支える石垣が正面に見られ、一段下がった斜面では畑が広がり、その畑を支える石垣も併せて見られ、祖谷地方ならではの歴史的風致が形成されている。

### ③祖谷地域に見られる活動

#### ③-1 急傾斜地農業

祖谷地域の農業は、『東祖谷山村誌』（昭和53年発行）によると、藩政時代には、きびしい年貢の取り立てや、土地に対する統制が加えられてきたことによって、農業の発展はみることができなかつた。しかし明治以降は農業地域開発、振興会等の各種団体や組合結成がなされたところにより発展のきざしがおとずれたと記されている。

この地域の農業は、急峻で狭小な土地が大部分を占め、稲作に適さない地形が多いため「ごうしゅういも」（ジャガイモ）や「蕎麦」が粟ひえや稗あずき、小豆みつまたとともに古くから盛んに栽培され収穫※されてきた。この種が多く栽培されてきた理由に、標高約800mに位置しているため、昼と夜の寒暖差が大きく地温の上昇は緩やかであることと、急傾斜地の痩せた畑は、「ごうしゅういも」や「蕎麦」などの生育に最適地であったためである。

「ごうしゅういも」は、通常のジャガイモより小粒であるが、肉質がしまっており、串に指しても割れず、粘り気があり味も濃いのが特徴である。こうした特徴を生かし、この地方では多くが田楽でんがくに使われてきた。田楽は「デコ（人形）マワシ」と呼ばれ、煮炊きした「ごうしゅういも」に、こんにゃく、石豆腐に味噌を全体に付け、竹の串にさし、囲炉裏であぶりながら廻して食べる食文化があり農家では最高の料理となっている。

「ごうしゅういも」収穫が終わる8月頃には「蕎麦」の種子が蒔かれ、9月になると重要伝統的建造物群保存地区である「三好市東祖谷山村落合」をはじめ、各集落の畑で「蕎麦」の白い花が、畑一面を覆いつくすのが見られる。そして10月には「蕎麦」の収穫が

行われ、「はで」（乾かすための柵）にかけ乾燥させられる。乾燥後、脱穀だっこくされた実はすられて蕎麦粉となり、「祖谷蕎麦」や「蕎麦団子」等の原材料となる。

こうした急傾斜地の農業を支えているのが、石垣であり、家を造成する際や、畑を耕す際に出てくる山石を「だるま積み」という工法で石が積まれており、この地域の特徴となっている。

また秋には、山野に生えている茅や草木を、鎌で刈り取って束にした「こえぐろ」が集落周辺の畑地に立ち並び、春になると、畑の中に切り込んで肥料としている。こうした作業は、急傾斜地の畑の地力を保つための、この地方の人々の生活の知恵である。

※蕎麦は貯蔵性が高く、そば米・そばねり・そば団子等、用途が多かったため蕎麦の栽培は多かった。また、ごうしゅういもも貯蔵性が高く、蕎麦同様に用途が多く、昭和30年には10a（田んぼ1枚）で1,300kgも収穫をしていたという



■傾斜地での畑作業



■畑の肥料となる「こえぐろ」

### ③-2 東祖谷山村落合「三所神社の祭礼」

重要伝統的建造物群保存地区内にある落合の氏神、三所神社での祭礼行事は、旧暦3月5日（春祭り）、旧暦6月8日（夏祭り）、旧暦8月5日（秋祭り）の年3回行われる。春祭りは三所神社の神輿とだんじり、夏祭りは弓矢で的ももてを射て一年の豊作・平穏な生活を祈念する百手が行われ、秋祭りは聖神社（合祀）の神輿とだんじりが出る。だんじりは三所神社、聖神社共用である。百手は本来春祭りに行うものであるが、落合では春祭りに神輿・だんじりが出るので、時期をずらして夏祭りに行っている。これら祭礼行事は古写真や祭礼用ののぼり旗から、少なくとも昭和30年代より行われていたことがわかる。

祭礼の形態は、前日に神社から当とや家（祭りの当番）の家に神霊を移し、当家宅の祭壇で神霊を奉齋、翌日（本祭）当家の家から行列を組んで神社まで「お渡り」をし、神霊を本殿に還し神事を行うというものである。この基本形の上に神輿・だんじり・お練り・百手などの付帯要素が加わる。

祭礼の当番は4つの地区（西亦・上村・中村・下村〔P53図1〕）ごとにある「組」で行う。組のものが中心となって、当にしまた家に集まり皆なおりで直会に参加する。その後、神主を先頭にして神社まで巡行して戻り、神様を神輿に移し、境内を神輿が先頭に毛槍やなぎなたといったお練りやだんじりが巡行し、神輿台に神輿を置き神事が行われ、集落の繁栄や五穀豊穰などが祈願される。



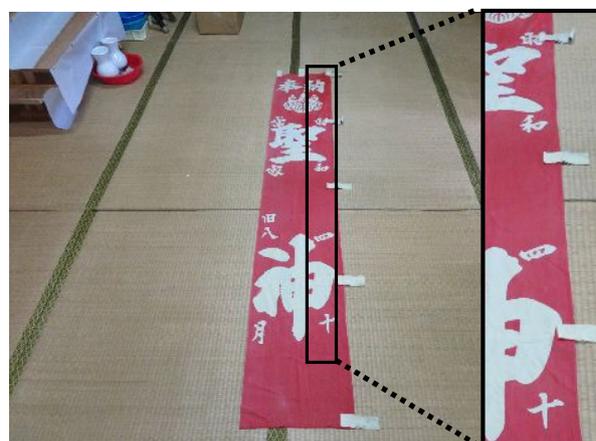
■だんじり



■昭和30年代頃のだんじりの様子

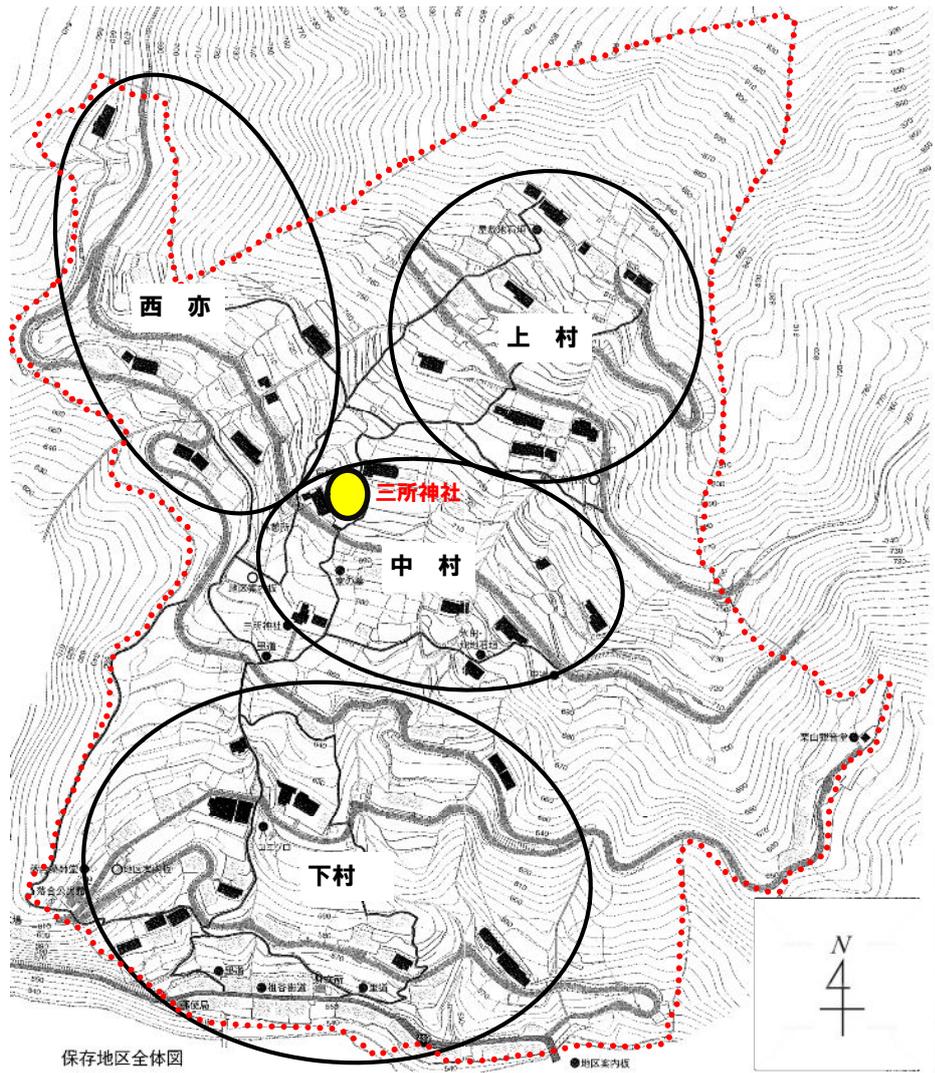


■お練り

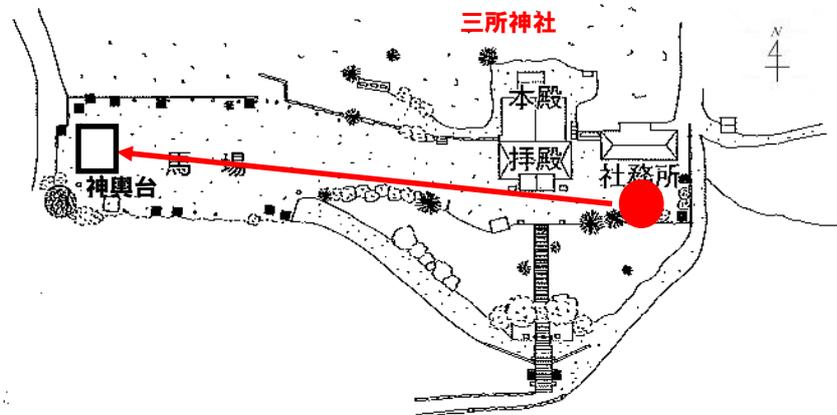


■昭和40年に奉納された祭礼用ののぼり旗

■三所神社祭礼時の4つの「組」



※図1 .....: 重要伝統的建造物群保存地区範囲



■神輿のルート



### ③-3 平家屋敷「阿佐家」の正月飾り

げんべい じゅえい  
 源平合戦に敗れた平家一門は寿永4年（1185）、多くが壇ノ浦の海に沈んだと伝えられている。

たいらのくにもり あんとく  
 しかし、その中の平国盛は安徳天皇を連れ家来と共に、いくつもの山を乗り越えて、祖谷へ移り住んだと伝えられている。

こうして祖谷には、数々の平家伝説が大切に残されてきており、代表的な言い伝えでは蔓橋は、追手が来てもすぐに切り落とせるように、蔓で橋を造ったという伝説がある。

このような、平家に関する伝説が残されている中に継承されてきた行事があり、そのひとつに平家の子孫と云われている「阿佐家」の正月飾りがある。それは平家一族が祖谷へ辿りついた日が、12月31日の大晦日で一夜明ければ正月、せめて松飾りをと松を探したが見つからず桧の枝を代用し元旦を迎えたという。それ以来、阿佐家では正月飾りは桧で行っているものである。文化9年（1812）の『燈火録』（本木蘆州・見聞録）、文化12年（1815）の『阿波志』（藩撰地詩）に記されていることから、江戸時代には行われていたことがわかる。

桧の枝は8本使用し、注連縄12本で繋げている。前には鏡餅・お神酒・白米が置かれ12月31日に準備が整ったら玄関障子を明け、神を呼び込んでいる。飾りは翌年1月15日まで置かれる。



■昭和34年の正月飾りを行う様子



■平成24年の正月飾り

### ③-4 蔓橋地蔵尊と蔓橋の架け替え

蔓橋地蔵尊が見守る蔓橋は、江戸時代に多いときに祖谷に13もの橋が存在したと記録されている。橋は現在のように鋼線等が無かった時代、植物のシラクチカズラというツルのみで架けられていた。そのため毎年架け替えが行われ生活橋としての安全性を確保していた。

しかし、明治から大正前期にかけて開通した祖谷街道（現県道32号線）によって、新しい文化が入ってくるようになり、蔓橋は針金の吊り橋へと変わり、次々と姿を消していった。その中、最後まで残っていたのが、現在の「祖谷の蔓橋」であった。その蔓橋も大正12年には近くに針金の吊り橋ができたことによって、1度消失してしまう。

消失後、地元住民だけでなく隣町（池田町）からは地域の歴史的文化財、蔓橋の再興が望まれた。それに伴い保存会が結成され、昭和3年に再興された。現在は、観光客の渡橋の安全のためワイヤが入っているため、毎年の架け替えは行われなくなったが、昭和30年に重要有形民俗文化財に指定されてから、架け替え技法継承のために3年に1回の架け替えが行われている。

架け替えは、「かずら橋保勝会」が行っており、保存会の構成は、橋と隣接する善徳、今久保、閑定、重末集落、4地区の住民のみで構成されている。

架け替えが終わると未来永劫にわたり、この蔓橋を次の世代、その次の世代へと残し伝えていくために、昭和41年から三世代の渡り初め儀式が行われるようになった。こうして儀式が終わり、蔓橋の架け替えが完工となる。

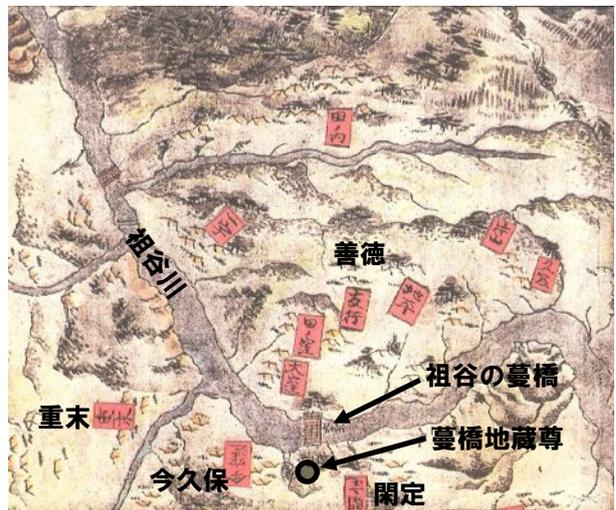
こうした蔓橋を見守る蔓橋地蔵尊では、架け替え時の安全祈願が行われるほか、大正9年に開通した県道32号線沿い（旧祖谷街道）の住民達より毎年7月21日には、供養及び家内安全祈願のため、お参りや清掃が行われている。



■定期的に行われている蔓橋地蔵尊の清掃活動



■祖谷の蔓橋架け替え



■「祖谷の蔓橋」と関係が深い集落（江戸後期の祖谷図）

・善徳：江戸時代は6つの集落（久及・片山・地平・友行・大窪・田ノ窪）に分かれていたが、1つの集落となり「全六」と呼ばれ、後に「善徳」となった経緯がある

■祖谷の蔓橋架け替え工程



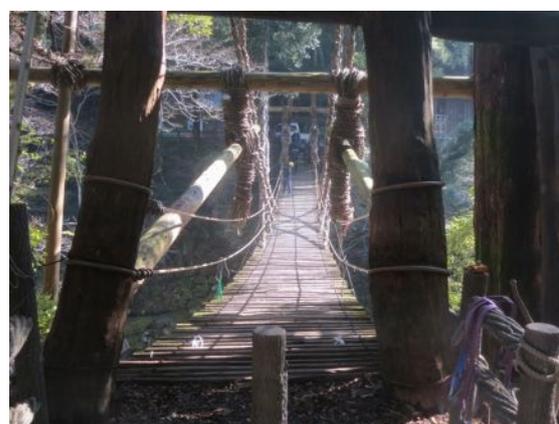
①蔓（シラクチカズラ）の採取



②蔓（シラクチカズラ）の運搬



③古橋落とし（古い蔓の撤去）



④古橋落とし後



かべつなは  
⑤壁綱張り



⑥化粧巻き (けしょうまき)



⑦雲網張り (くもつなはり)



⑧壁もつい



⑨さなぎ編み



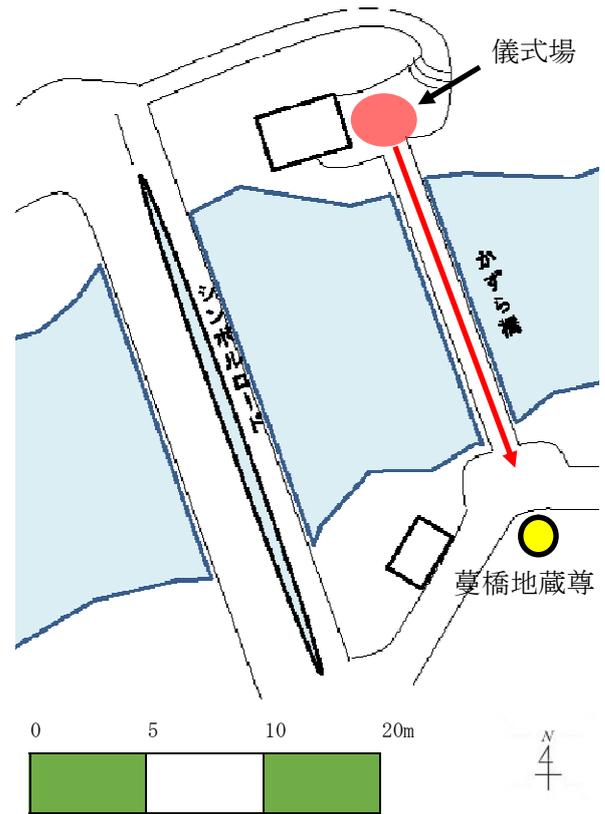
⑩完 成

## ■祖谷の蔓橋三代渡り初めの儀式

### 渡り初め儀式の流れ

1. **修 祓**  
しゅ ぼつ  
 (祭典の開始にあたり、参列者・お供え物を祓い清める。)
2. **降神の儀**  
かうじん  
しず  
 (土地に鎮まる神様をお迎えする。)
3. **祝詞奏上**  
のりとそうじょう  
ほうこく  
 (この土地をお借りすることを神様に奉告し、安全を祈る。)
4. **玉串奉奠**  
たまくしほうてん  
 (参列者自らが、神前に玉串※をお供えて安全を祈願する。)
5. **昇神の儀**  
しよじん  
こぎ  
 (神様に元の御座にお帰り頂く。)

※玉串： さかき 榊



■祖谷街道側を入口とし、出口へ向かい渡り初めが行われる



■渡り初め儀式の様子



■渡り初めの様子

## ③-5 重要無形民俗文化財

「西祖谷の神代踊」  
じんたい

天満宮では、旧暦の6月25日に雨乞い踊りとして神代踊りが奉納されている。

昔は笠踊りとか太鼓踊りと言われており、笠かぶ踊りの名は、女子が花笠を冠かぶって踊ることから名付けたものであり、また太鼓踊りの名は、男子が打ち鳴らす太鼓に合わせて、踊ったためであるという。

神代踊りと言われ始めたのは、大正11年1月、昭和天皇が皇太子として徳島県に行啓された際、台覧してからのことである。

この神代踊りは、いつの時代から祖谷の人々によって行われたか、またどんな目的をもって行われたか、そして、その歌曲や楽器は創建当時のままであるか、これらに関しては文献もない。

しかし、大正11年に発行された『西祖谷山村史』や言い伝え、笠踊りの実態等から、この踊りの起源は菅原道真さぬきが讃岐守在任中に発したものでないかと言われている。

宇多天皇の仁和4年(888)、菅原道真は、大干ばつによって稲の植え付けに苦勞していた農民のために、今の香川県綾歌郡綾川の下流にあった、城山に祭壇を設けて、各種の踊りを催して雨乞いの祈願を行った。その結果、たちまち雨が降り田植えができるようになり、農民達は喜んだという。

これを機に、雨乞いの祈願と踊りは、全国的に広まり、その際に歌われた民謡と踊りの一部が流れ流れて全国各地で行われるようになったという。

西祖谷山村で行われている太鼓踊り、笠踊りも、その一部が伝えられ今日の神代踊りの起源になったものだと言われている。

神代踊りの構成は、采振さいぶり・天狗てんぱらい・露つゆ 払はらい・獅子しし・薙刀なげなた使いばうぶり・棒振やっこ・奴ぞうり・草履かねたきとりやまぶし・太鼓打かねたき・鉦やまぶし 叩やまぶし・カチカチ・笛吹・山伏・踊り子からなる。

神代踊りの次第は、天満宮で神事を行った後、境内において、山伏の法螺貝の吹奏を合図に行進して円陣となる。采振はこの間に場内を整理する。次の法螺貝の合図にて、鉦や太鼓が鳴り響く。棒振・獅子・薙刀・踊り子等が円陣

に沿って行進し活動する。露払・獅子・薙刀・棒振・奴・草履取りが内円となり、その他の人々が外円となって踊る。

神代踊りは、西祖谷山村の天満宮(標高約1,000m)にて、毎年旧暦6月25日に行われており、奉納1カ月前には練習が行われる。



■天満宮境内での神代踊り

#### ④吉野川支流祖谷川流域に残る歴史的風致（祖谷）のまとめ



■重要伝統的建造物群保存地区「三好市東祖谷山村落合」（東祖谷中上集落より展望）

祖谷地域には、伝統的な古民家や、平家伝説に関連する伝統的建造物と周辺の急峻地形に形成されるのどかな段畑風景、そして、厳しい自然環境のもとで伝統生業や生活慣習を大切に継承する人々の姿がある。

この地に古くから伝承されてきた平家伝説は、こうした固有の風土によって育まれ、脈々と今日まで受け継がれてきたものである。素朴な山村集落の原風景と平家伝説が一体となった風情には、地域固有の歴史と伝統が醸し出されており、山村集落の素朴さに癒しと温もりを感じさせる歴史的風致が形成されている。